
真似ばかりする女

森 マリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真似ばかりする女

【コード】

N0735Q

【作者名】

森 マリ

【あらすじ】

真似ばかりされる「私」に起きた、不幸な出来事。

(前書き)

いろいろなジャンルを書いてみたかったので書きました。書いている私は楽しかったのですが、読者のかたはどうでしょう？素直な感想を教えてください。つまらなければ、どうぞストレス解消のつもりでご指摘やご感想を書きなぐってください。

-私

香奈がもう一度学校へ戻ると言い出したのは特急を降りて、自宅へ向かう普通電車を待つ駅のホームだった。電車を降りてホームにある椅子に腰掛けたばかりだった私は怪訝な顔をしてみせる。香奈は白いマフラーで隠れた口の前で両手を合わせて合掌し「ごめん、ごめん」というジェスチャーをして反対側のホームへ行くために階段を下りて行った。わざわざ時間をかけて取りに帰る必要のある忘れ物というのは一体何なのだろうかと考えながらも、すぐにどうでもよくなつて私は音楽を聞くためにイヤホンに耳に着けた。

鬱陶しい奴がいなくなり、私は小さくため息をついて右肩を2、3回疲れをほぐすように回した。バッグから携帯電話を取り出し、mixiのページを開きながら友人の日記などを確認する。日記には気分が悪くなるような愚痴が延々と綴られている。友人の愚痴を眺めるのは気分が重くなるし、何も得ることはできないのは分かっているが、ちゃんとチェックしていないと友人間のコミュニケーションに支障をきたすことになる。

日記を確認する事で友人の日常を知り、次の日の友人メンバーの話題となる。つまり、友人たちの日記を確認していないものは会話の中に入れないのだ。だからこの作業をめんどうだとは思わない。当然のこととして私の習慣となっていた。

友人たちの日記を見ていると、携帯の画面の上の方にメールを受信したことを知らせるマークが現れた。それと同時に腕の中で急に震えだす携帯。誰からメールだろうかと思いつつ確認すると「香奈」の文字が。

『前見てみて』という文字と、にこりと笑った顔を表す絵文字が

文末に添えられている。私は顔をあげて、ホームの反対側を見た。駅には二つのホームがあり、その間に二つの路線がある。私が居る所は上りの電車が来るホームで、香奈が向かったのが下りのホームだ。私たちの家はお互いに、ここから一駅上った所にある。学校からこの駅までは特急で来れるが私が降りる駅には特急が停まらないために、一度普通電車に乗り換えなければならない。

反対側のホームの、ちょうど同じ場所に設置してある椅子に自分とまったく同じ恰好をしている香奈が座っていた。香奈も私と同じように足を組んでおり、短い制服のスカートから白い足がのびている。香奈は赤い眼鏡の奥で目を細め、こちらに向かって手を振っている。

なにからななまで真似ばかりする香奈が鬱陶しい。いつごろから私の真似をするようになったのだろうか。高校1年の時に出会ったときはそんなことはなかった。たしか2年生に上がる少し前、おそろいの携帯ストラップを買った時から私の真似をする傾向が始まった気がする。私が過剰に喜んで見せたのが悪かったのかもしれない。

いまでは私が好きなブランドの真っ白なマフラーも、染めた髪の色も、ストレートの長い髪型も同じだ。そのせいで制服を着ていると恰好はまったく同じに見える。さらに香奈と私は顔や体のスタイルが似ているためマフラーでお互いの口元が隠れると、友人でもどちらが私か分からなくなるほどだった。香奈にまねをされる度に、私は個性を奪われているような気がして許せなかった。

許せなかったのだが、香奈にそれを直接言葉にした事はなかった。香奈のいない所で、友人達に愚痴をこぼすと皆が私に共感してくれるし、一緒に香奈を非難してくれた。それが心地よかったのだろう。私は、ホームの向こう側で手を振る香奈に合わせて手を振ってあげた。目を細め、あたかも笑っているように装う。マフラーの下では、笑ってなどいない。小さく舌打ちをする。

いつも香奈に真似をされている私だが、今日は少しばかり違って

いた。小さな抵抗だが、今日はいつもかけている眼鏡をかけていない。コンタクトレンズで登校したのだ。高校に入学して二年と九ヶ月間かけつづけていたお気に入り赤い眼鏡だ。

香奈は目が悪くないにもかかわらず三日ほど前からおそろいの赤い眼鏡をかけ始めた。だから今日はコンタクトにしてやったのだ。

今日の朝なんて傑作だった。香奈は「えー、どうして今日は眼鏡をはめないの？」っていいながら悲しそうな顔を見た時には、私の胸は優越感に満たされたのだった。

恰好だけならまだいいが、最近では私がずっと好きだった剣道部の坂上先輩のことが気になっていいるなどという事を言い出した。確かに私は香奈に坂上先輩の事はあきらめたと言っていたが、まだ気になっていることぐらいは分かっているはずだ。頭にきているものの、私はそれを表には出さずに知らん顔していた。

さらに昨日、香奈が言い出した事には耳を疑った。本当に耳がおかしくなったのかと思ったし、日本語の意味が新しく変えられてしまったのかとさえ思った。

「私にもストーリーカーがいるの」

香奈は確かにそう言った。

香奈なりの冗談で、私は笑うべきなのではと思ったのだが、そのあまりにも真剣なその顔を見るとあながち嘘でもないのかもしれないなと思えた。

香奈の話によると、三週間前に妙な男に話しかけられたらしい。それからというものの帰り道につけられたり、電車の同じ車両に乗って来ることあるらしい。

男は別の高校の生徒で、今まで見たことはないらしい。男の容姿はボサボサの髪の毛は四方八方へと伸びている。剃られた髭は濃く青々と顎から耳の下まで生い茂っていた。眉毛にも気を使っていないらしく、毛むくじやらの虫がそこに止まっているようだったらしい。体系はといえば妊婦のように膨れ上がり、メタボリックの象徴

のようだったらしい。

それを聞いて呆れてた。それは絶望にも近いものだ。香奈という女はどこまで自分の真似をしようとするのだろうか。

私には半年以上も前から久野というストーリーカーがいる。香奈の話と違うのは他校の生徒ではなく、同じ学校の生徒ということくらいだ。その他はすべて香奈が話した人物像と一致する。つまり、私をストーリーカーしている久野という男と、香奈をストーリーカーしている男の容姿がほぼ一緒なのだ。

ここまで真似をされれば、いい加減気分が悪くなる。私という存在がコピーされ吸い取られていくような不快な感覚だ。

香奈が私を真似するのが酷くなる前はよかった。「美紀の事を心から尊敬しているのよ。あなたのような輝ける人になりたい」なんてことを毎日のように言ってくれていたからだ。それはそれは気分がいいものだった。香奈は私を目標とし、尊敬してくれていたからだ。

真似される事も、私を目標としてくれているからこそぞだと思っていたが、ここまでくると我慢の限界だ。

私は本当にストーリーカーを気味悪いと思っているし、やめさせたいのだ。嘘でも「自分もストーリーカーされてる」なんてことを言っただくしくはない。

私は向かいのホームに座っている香奈から視線を落とし、携帯の画面を覗く。それ以来、香奈の方は見ないようにした。私はイヤホンから流れる音楽に聴覚のすべてをゆだね、手元の携帯電話に視覚のほとんどを注いだ。

mixiとは別に友達のブログを確認しておく必要がある。ブログにはコメント欄がある。友達の間でもリーダー格の優子のブログ

には既に他の友人たちからの、コメントがいくつか書かれていた。最近聞いた曲の歌詞が良いという内容のブログだったため、私はwebでその歌の歌詞を検索して一通り読んでからコメントする。歌詞は「逢いたくて、逢いたくて、苦しくなるの」というありきたりで薄い内容のものだったが、私は「マジで感動する歌詞だよね」とコメントしておいた。

同意する事が身を守ることだと私は心得ている。携帯をいじっている間、親指が忙しそうに携帯のボタンの上を上下左右に滑っている。

いくつかの友人のブログをチェックした後、大きく息を吸い込んでため息をした。その時、私は香奈が居るホームの方へと目が行った。香奈も私と同じように携帯の上で親指が別の生き物のようにせわしなく動き回っていた。

ふっと、視界の端の方にある人物の姿とらえた。それは久野だった。学生ズボンへその上あたりまであげており、シャツは綺麗にズボンの中におさまっている。学生服としては理想的な形なのだろうが、それは同時に「ださい」の代名詞だといえる。

久野のオドオドとした態度を見ると、胸にモヤモヤとしたものが生まれ、やがてイライラに変わった。授業中にアニメのキャラクターをノートに書いているのを見た時にはおもわず「キモッ」と声を漏らしてしまった。聞こえたかどうかは分からない。

それにしても、あいつはこんな所でないにしているのだろうか。この駅で久野の姿を今まで見たことなんてない。それに彼は確か自転車通学だったはずだから、電車は使わない。

左わきに桜色のハードカバーの本を挟んでいるのが見える。あれは確か私が読みたいと言っていた恋愛小説じゃないだろうか。まさか、私があるを読みたいと言っているのをどこかで聞いて買ってきたのではないだろうか。

久野は自動販売機の影から香奈の方を覗きこむようにしきりに見ている。その様子を見ていて私はある事に気付いた。

久野は私と香奈を間違えているのだ。同じ恰好をしているし、マフラーで顔も隠れているために間違えるのも無理はない。

そして香奈も自分がストーカーされてしていると勘違いしているのだ。つまり、彼女が話したストーカーは私のストーカーの久野なのだ。

どっちも勘違いしてるなんて笑える。二人ともバカね。ここから見る景色はマヌケそのものだ。私は香奈と同じように口元を隠したマフラーの中で小さく笑った。

久野の挙動は明らかに不自然だった。自動販売機の周りをうろつろつと行ったり来たりしている。まさか、ナイフでも隠し持つてるんじゃないだろうか。私が今まで久野に冷たい態度で接したから仕返しに私を刺しに来たんじゃないだろうか。

私は久野に声を掛けられて無視したことや、あからさまに嫌な顔をして見せたことがあった。それくらいで人を刺すだろうか。いや、彼のような暗い奴は何するかわからない。

もしも、本当に香奈が私と間違えられて刺されたらどうする。もしかしたら……不意に嫌な予感がよぎり、なにかに胸を引っ掻かれたように痛みが走る。香奈が久野に首を刺される映像が鮮明に浮かんだ。

- 僕

僕はずっと彼女を待っていた。きっと彼女も僕に会いたくないはずだ。いや、会いたくないにきまつてるじゃないか。まだお互い素直になれていないけど、きっと今日は素直になれる気がするんだ。

何度か彼女と言葉を交わした時に分かったんだ。彼女と僕がであった事が運命だつて。言葉ではそう言わなかったけれど、見ていればわかる。会話つてなにも口と口でするもんじゃない、そりゃキ、キ、キスをするときは口と口でするよ。でも心は目と目で分かりあえるもんだ。

最初は僕が彼女に「こんにちは、時々同じ電車になりますね」つて声をかけたんだ。そりゃ、胸はバクバクと音を立てて鳴ったさ。血管が耐えられなくなって破れちゃうんじゃないかって思ったよ。彼女も驚いた顔してたな、きつとおんなじようにドキドキしてたんだね。

でも、なんだか彼女に声をかけているうちに僕を避けるようになってたんだ。たぶん、これが『マンネリ化』というやつなんだろうな。付き合っていると本当にいろいろあるもんさ、仕方ないよ。素直になれない時もある。

彼女が僕を避け始めてからは、電車の時間を変えたのかなかなか会えなくなってしまった。女心は分からないな。お互い会いたいのにごうしてそんな意地悪をするんだろう。きつと僕を試しているんだね。いいよ、いいよ、大丈夫。僕はこうやって今日も待ってあげたよ

そして今日、やっと彼女を見つけた。いつも、彼女の真似ばかりする女と一緒にいるから声がかけれなかったけど、今日はちゃんと一人で居る。きつとワザと一人になったんだよね。僕が話しかけやすいように。

でも、酷いじゃないか。僕はずっとホームの右端で待っていたのに、君は左端で待つてるなんて。確かに約束はしていなかったからしかたないけど、もしも僕が見つけてなかったら今日もお互い気付かないままだったかもしれないんだよ。

君がいつも僕の事を待つてばかりで僕を自ら探そうとはしてくれないのは不満だよ。でも僕だつて君の気持わからないわけじゃない

よ。僕に見つけてほしいんだろ？そうやって愛を感じたいんだね。

僕は自動販売機の影から彼女の後ろ姿を眺めている。やっぱり可愛いな。可愛い。いつも彼女の真似ばかりしている女はいないな。確かにいつも真似ばかりしている女は、僕の愛しい彼女にそっくりだ。そっくりだけど、僕の目はごまかせない。だって運命の人は目じゃ分らないんだ。心で感じるもんだからね。

早く彼女の横へ行って抱きしめてあげたい。抱きしめてあげたいんだけど、以前、彼女は僕が声をかけた時大きな悲鳴を上げた事があった。彼女の家の近くの曲がり角で待っていて、急に声をかけたからだろうと思う。でも、彼女は少し僕に意地悪してやるうっていう気持ちもあつたはずだよ。彼女だって僕と喋りたいんだ、なのに素直になれない。

だから今日は良い物を持ってきた。すこし手荒なまねと思うかもしれないけど、次に悲鳴を上げられてしまったら僕はショックで立ち直れないよ。いくら素直になれないからってそれは許せないな。

その良い物っていうのは本に挟みである。正確に言うと刃の部分は本に挟んであつて、木製の柄の部分は外に出ている。人に見れてどうしてこんなものを持つてるんだって怒られたら嫌だ。だからわざわざ隠しておくのさ。ただ、彼女を素直にさせたいだけなのに、これが見つかったら騒ぎになってしまふ可能性だってある。だから本にナイフを挟む必要があるんだ。

もちろん彼女が僕に意地悪して悲鳴なんて上げなければナイフを出す必要なんてないんだ。

でもね、僕は本当はナイフなんて必要ないって思ってる。さすがに彼女だってそろそろ素直にならなくちゃ僕に嫌われてしまつかもしれないって考えてるはずだ。彼女はそれを心配してるだろうから、今日彼女が素直になつてくれれば今までの事なんてこればっかも咎めるつもりはないんだよ。

さあ、そろそろ彼女に声をかけないと電車が来てしまう。僕は「ペプリカホワイト、ペプリカパーカル」って魔法の言葉をつぶやいていてから彼女の方へ一歩足を前進した。きつとこれから僕に声をかけられる彼女も緊張してるはずだから僕と同じように『ラブ魔法リリアル』に出てくるキャラクターのラブホワイトの魔法の言葉を唱えてるはずだ。

僕は自動販売機の影から一歩だけ足を踏み出したけど、それ以上は足が上手く動かない。だから足を戻して、もう一度魔法の言葉を唱えたんだ。そうすると不思議と魔界の力が僕の足に力をくれたんだ。僕は一直線に彼女の元へと足を進める。

やっぱりラブ魔法リリアルの魔法はすごいや。

- 私

久野はゆつくりと香奈の方へ近づいていく。何故だかわからないが嫌な予感がした。本当に彼女が久野に刺されるような気がするのだ。真似ばかりされるのは癪に障るが、決して香奈に死んでほしいなどと思ったことはない。それに目の前で自分と間違えられて刺されるかもしれないのだ。

香奈と久野の距離が近づく歩調に合わせ、波のように不安が私の方へ押し寄せてくる。ホームの向こう側に居る久野の顔が歪んでいるのがここからでもわかる。緊張ではない、あれは憎悪だ。きつと話しかけられても無視し続けた私を怨んでいるに違いない。

私は携帯の画面に視線を落とし、親指を必死に動かして香奈にメール文を打った。「香奈、逃げて！」という短い文章を打ち終えると送信ボタンを押す。見えない電波に乗ってその文字は香奈のもとへと運ばれていった。だが、メールを打ち終えて送信した瞬間、香奈は携帯をバッグの中へ仕舞ってしまった。

恐らくメールはまだ香奈の携帯へは届いていない。どうして電話しなかったんだろう。焦ってしまい冷静な判断を下せなかった。

香奈に電話しようとして携帯を操作したが、急に油を失った機械のように指が動かなくなり携帯をコンクリートの上へと落としてしまった。きつとガシャという音を立てたのだろうがイヤホンをはめて大音量で音楽を聞いている私の耳へその音は届かない。

私は携帯を拾いながら香奈が居るホームを見ていた。久野が香奈の真横まで来て、彼女の肩にゆつくりと手をかけた瞬間だった。香奈は久野の方を見上げるように振り向く。

香奈は久野の顔を確認すると首をかしげて、マフラーを下にずらした。口元があらわになると、それが私ではなく香奈だという事がわかったのか、久野は酷く驚いたような顔をしている。

それから久野は照れたように頭を掻いて見せた。

その光景を見て私はホッとしていた。久野が香奈だと気づいた事で、彼女が襲われる事はないだろう。真似ばかりする香奈が鬱陶しいのに変わりはないが、死んでほしいとまでは思っていないし、一応は私を尊敬し慕ってくれているのだ。

ホッとしたものの、嫌な予感は相変わらず胸にとどまっている。そしてそれは現実のものとなった。

香奈と久野が二、三の言葉を交わした後でこちらを指差してきた。おそらく口の動きとそのジェスチャーから察するに「美紀は向こうのホームにいる」というような事を言ったようだ。

久野の鋭い視線がこちらに向けられる。だが、すぐに久野の表情が大きく変化した。私に対する怒りや、憎悪といったたぐいのものを表す表情では無い。その表情は恐怖や驚きだ。まるで私を、アマゾンのジャングルの奥底に住む化け物であるかのように驚いた顔で見ている。

だが、その表情をしているのは久野だけではなかった。隣にいる

香奈も同じように表情を変え、指差す手が大きく震えているのが見える。私は首をかしげて見せた。

久野の口が大きく開き何かを叫んだようだったが、耳を覆う大量の波が彼の声をかき消した。

違う、香奈と久野は私の方を指差しているのではない。そう気付いた時にはもう遅かった。右側に人の気配を感じて振り向くと、ゲジゲジの眉毛とボサボサ頭の男がそこに立っていた。剃られた髭が青々と茂っている。制服を着ていなかったら同じ世代の人間と思えないほど老けて見えた。

男が着ている制服は私たちとは違う学校の制服だった。

まさか……そう思っただけでイヤホンを外してマフラーをおろそうとした時にはもう遅かった。私の首に固く熱い物がマフラーを破り突き刺さる。

イヤホンを外した事で辺りの雑音が鮮明に聞こえた。

「香奈ちゃん、どうして僕を無視ばかりするの。どうして素直になれないの？」

男は額にいくつも皺を作り、並びの悪い歯を見せて怒りの表情を表していた。

男はずっと私に声をかけていたのだろうか。私はイヤホンをつけていてたし、久野の動きに注視していたために男に気付かなかった。

私は一度座っていた椅子に頭を打ち、それからコンクリートの上に崩れ落ちたが、頭をぶつけた音が脳に響くだけで痛みは感じなかった。

瞼がゆっくりと閉じて行き、完全に目が光を失った時、私は気付いた。

この男が香奈のストーカーだ。

「行き普通電車がホームに到着します。白線の内側に……」

それが私の聞いた最後の音だった。

- 僕

ほら、僕を無視するからこんなことになるんだ。何度も何度も声をかけてあげたのに無視するからこんなことになるんだ。僕のせいじゃないぞ。これは僕のせいじゃない。

だって無視されたら誰だって悲しいだろ。どうして素直になつてくれないんだ。どうして素直になれないんだ。僕の勇気を踏みにじりからこんなことになるんだ。僕のせいじゃないぞ、僕のせいじゃない。絶対に僕のせいじゃないんだ。素直じゃない君みたいなじわるっ子はラブ魔女リルカの魔法で治してあげないんだから。君が全部悪いんだから。

僕は赤く染まったマフラーに手をかけて、下に引つ張った。口元があらわになった瞬間、そいつが香奈ちゃんの真似ばかりする女だという事に気付いた。

あれれ、こいつは香奈ちゃんの真似ばかりする悪い女じゃないか。てつきり香奈ちゃんを刺したかと思っていたのに。

それに香奈ちゃんの真似ばかりするこの女はいつも赤い眼鏡をはめていたじゃないか。今日はその眼鏡をはめていない。ちょっと待てよ。よくよく考えてみれば香奈ちゃんは僕を無視したりしないんだ。無視してたのはずっと香奈ちゃんの真似ばかりするこの女だったんだ。僕と香奈ちゃんとの関係を壊そうとこの女が意地悪してたんだ。そうだったのか。だまされるところだった、よかった、よかった。つまり僕は香奈ちゃんを守る事ができたんだ。だってもし僕に嫌われたら香奈ちゃんは悲しむでしょ？だから僕が香奈ちゃんを守ったのと一緒なんだ。この悪い女の陰謀を暴いたのさ。

僕は、ホームの反対側を見た。さつき、大きな声で叫んでた冴えない男が居る。ぼさぼさの頭にでゲジゲジの眉毛をしていて、お腹が妊婦さんみたいに膨れてる男だ。僕もあんまり容姿に気を使わない方だが、あの男ほどじゃないな。あの男よりも僕はスリムで、ハンサムなはずだ。

そのさえない男の横に、香奈ちゃんが居る。

よかった、やっぱり香奈ちゃんは喜んでくれている。ニンマリ笑ってくれている。僕は香奈ちゃんのために悪い奴をやっつけたんだ。君の笑顔を見るためにやっつけたんだ。

僕が手を振ると香奈ちゃんも笑顔で手を振り返してくれた。僕が君の真似ばかりをする悪い女を倒したんだよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0735q/>

真似ばかりする女

2011年1月16日05時34分発行